
氷のパズル

天青石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

氷のパズル

【NZコード】

N4201D

【作者名】

天青石

【あらすじ】

僕はこの世界から「削除」された。しかし、僕は「削除」に巻き込まれたにも関わらず、まだ生きている。目が覚めると別の世界で、そこはファンタジーな世界だった！それに僕と同じような経緯で来た人も多数！？数多くの謎を、順に解き明かしていく！

「ありがとうございました」

店員の声をバックに、アキラは買つたばかりの「目的の品」を持つて店を出てきた。

彼が出てきたのは本屋で、かなり規模の大きな、どんな本でも置いてあると評判の店。

彼はそれを聞き、どうしても見つからなかつた本を探すため、はるばる隣町からここへ来ている。

彼の名前は、氷室アキラ（ひむろ あきら）

専門学校の2年生。年は17歳。性格は物静かだが好奇心は強い。

運動・勉強ともに平均的で特徴なし、その性格も相まってかあまり目立たない存在。

友人曰く「かなり偏つた無駄知識の宝庫。あと先駆者かつ努力家」

教師曰く「要領はいいが努力をしない奴。目立つた特徴はないが何

かを感じる

本屋から出てきたアキラは、心なしか上機嫌なように見える。

少しでも早く読みたいと思っているのか、苦労が無駄にならずに嬉しいのか。

そのため彼は寄り道はせず、さっそく自転車に乗つてしまつすぐ帰路についている。

ふと上を見てみると、時刻はもう夕方なのだろうか、空が赤く染まっている。

（なかなかキレイだな、久し振りに見た気がする…）

夕陽を見てそう思ったアキラは、空を眺めながら走ることにした。

目に映るのは、見渡す限り続く緋色の空、橙色に染まつた雲、赤い太陽。

長い間意識して見ることもなかつた夕日の情景に、彼は見とれてい

た。

ただ事故を起さないよう、ちゃんと前方には注意を向けてくる。

すると突然、空を横切るよつとして黒い光が走った。

それはまるで黒い流れ星のよつでもあって、そして鳥の影のよつも見えた。

アキラが赤い世界を横切る影を、眼で追つていると

パキッ、といつ音とともにアキラの視界に亀裂が走った。

「えつ？」

突然の事態に、アキラは思わず声を上げた。

反射的にブレーキをかけたため、乗っていた自転車が急停止する。

(な…なんだ?)

彼は最初、目の異常か何かだと思ったが、それは違ったようだ。

アキラの周りにいた人たちも、戸惑ったように周囲を見回している。

(エエ? なんだ?)

“どうやら空だけでなく”周辺の空間すべて”に亀裂が入っているようだった。

よく見てみると、この一帯を包み込むかのようにそのヒビが広がつていいくのが分かる。

(いつたい、なんなんだ?)

そう彼が戸惑っている間にも、亀裂は止むことなく広がり続けて、

ヒビは亀裂となり、空間自体を割れたブロック氷のように変貌させていく。

そして空間に作られた断層が、光をめぢやくぢやに屈折させ視界を奪う。

(ちょっと、待つてよー！)

考える時間を与えないほど、急激かつ断続的な変化だ。

それに本能的な危険を感じて、アキラは無意識の内にこの異常な場所から逃げ出そうとしたが、彼を包囲するかのように入った亀裂がそれを阻み、それを許さない。

そうしてこりひぢにも、断層のズレが大きくなつていや…

そして次の瞬間、何かを考えるよりも早く

「わあっ！？」

ヒビに囲まれていた一帯が、まるい」と音もなく砕け散った。

「ぐううー。」

同時に、強烈な光、音、そして衝撃がアキラを襲つた。

意識が飛びそうなほど、この事象に振り回されているなか

彼は視界の端に空間と一緒に碎かれる建物、車、人間を捉えた。

それを田の当たりにして、自分もこうなるのか…と彼は悟り、そのまま気を失つてしまつた。

Piece - 1 始まり

見渡す限りの草原が続いている。

そこには一人の少女らしき人影が立っていた。

彼女は黒に近い紫色の長髪を持ち、それを後ろでボニー・テールのよう束ねている。白い作業着のようなものを着込んでおり、左手には何のためにかは分からぬがやたらと大きなサーベルを握んでいる。

しばらくして、その少女は目線の先を見やつて一言、呟いた。

「これは…、ひどいなあ」

まるでどこかのサバンナのような、広い平原の中。

そこに空気をぶち壊すかのように大量の残骸が置かれていたのだった。

その残骸を構成するのは、粉々に打ち砕かれたコンクリート、バラ

バラに引き千切られた鉄の塊、そして焼き切れたカバンに、パーティに分解された自転車。

どれもこれも酷い有様で、原型なんてどこにも見当たらない。

ちょうど町に強力な爆弾でも落として、その残骸を持ってきたような感じだ。

ただ、これを運んできた形跡などは無く、下敷きになつた地面にも草は生い茂つてゐる。

これを見ると、どう考へても突如としてこの残骸がここに現れたとしか考へられないのだが。

それもそのはず、これが現れたのは、つい数分前のことなのだから。

数分前

ドオオオオオン！と轟音がした。

同時に地面が激しく揺れ、強烈な波動が感じられる。

「わわわっ」 がしゃん。

広大な草原に面した町エリニア。

一度は栄えたこの町だが、いろいろと訛あつて今では過疎状態となつている。

そんな中でも特に外れた場所にある小屋。そこから人の声がした。

「やつば… 割つちやつたよ…」

そこには一人の、紫ががつた黒髪が特徴的な女の子がいた。

彼女は先ほどの衝撃に驚き、つい持っていたグレープジュースの入ったカップを

手から地面へと取り落としてしまつたよつだ。

最初は焦ったような表情を見せたが、しかし数瞬後には衝撃の来た方向を向いて

「とりあえず、あっちが優先ね」

と言つやいなや、彼女は壁に掛けてあつた白い服を羽織り家を飛び出していく。

玄関のすぐ横にスタンドで立ててあつたバイクに乗り込み、エンジンをかける。

バイクはかなり古い物のようで、傷だらけの上に修理跡だらけだ。

胴体部分横にはかなり大きなサーべルがくくりつけられていて、異様な雰囲気を出していた。

「さてと… 大体5、6km先、方角はこっちね… それ！」

少女は思いつきリアクセルを踏み込み、バイクを急発進させた。

あつという間に大きく加速し、彼女は小さな点になつていく。

「さて、生存者はいるのかな？」

少女は一体これが何か知っているような口調で呟きながら、ガレキの山へ歩を進めた。

適当に生存者がいそうな場所を考え、素手でガレキをどかし始める。

ガシャン。 ばたん。 ドスン。

彼女は華奢な見た目からは想像できないような力を發揮し、テンポよくガレキをかき分けていく。

適当にやっているように見えるが、もちろん崩れないように計算しながらの行動だ。

「よつ……ほつ……じのつ……およ~？」

すると、バラバラ自転車のすぐ近くのコンクリート下から少年が見つかった。

見えている部分 額からは血が流れ、右腕はどうみても骨折している。

「生存者だ！」

少女はいきなり嬉しそうな声で叫び、少年を無理矢理ひっぱり出した。

出てきた半身も傷だらけだったが、半分は今ついたとも思えなくもない。

こんなのが人に対する扱いではないうえに、第一、生存確認もまだだ。

しかし彼女は生きているのを確信しているような行動…

「いつまで寝てるのよ、早く起きなさい！」

つまり少年の頭をバシバシと遠慮なく叩き、起らしやうとした。

最初は無反応だったものの、しばらくするとさすがにたまりかねて少年は目を覚ました。

「う…ん。何だよ… って痛ッ！ なにこれ痛い！」

当然の「」とく、強烈な痛みに襲われて少年は悲鳴を上げる。

それを意に介することなく、少女は澄んだ声で質問する。

「あんた、名前は？」

人がいることに気がつき、驚きながらも少年は答える。

「ア…アキラ、氷室…アキラだよ…」

「あら、奇遇ね」

見渡す限り続く平原に、唯一存在する”高さ”を持つもの。縁のない大きな山。

そのガレキで構成された山のふもとに、二人の人間がいた。

一方は真っ赤に染まつた服が見るからに痛々しい、傷だらけの少年アキラ。

もう一方は純白の作業着にサーベル装備という、違和感ありまくりな少女だ。

「私もアキラよ。アキラ・エルステッドって言つの」

少年と同じ名前、アキラと名乗つた少女はサーベルを收め、質問を続けた。

「あなたはなんて呼ばれてるの？私は”アキラ”って呼ばれてるけど」

「僕…？僕は…僕もアキラって呼ばれてるよ…」

「はあ？それじゃあ彼つちやうじやない」

アキラ（ ）が答えると、アキラ（ ）は即座にそつ言ご捨ててなり黙り込んだ。

少しの間をあいて、彼女は再度口を開く。

「あんたは…そうね、苗字は氷室でしょ？だったらあんたは今からアイス！」

なんて安易かつ適当な提案だらう、とアキラ（ ）は思った。しかも命令形だ。

彼は不快に思い反論しようとしたが、そつする前に彼女が第一言を発しそれを遮る。

「どう？氷室だからアイスルーム、それじゃ長いからアイスにした
みたのよ！ついでに言つと私の好物の”アイスクリーム”からも取
つたかな？あんた、もしかすると嫌だなんて言わないでしちゃうね
？言わないわよね？」

長いセリフを彼女は一息で言い切つた。やはり命令形な上に威圧ま
で付け足してあつた。

「どうやら自分の考えは何が何でも通す性格のようだ。

言い終えたアキラ（）を見て、ずいぶん勝手な事を言ってくれるな、とアキラ（）は思ったが、反論するような気力も有力な理由もなかつたので、苦笑しつつも素直に受け入れることにした。

「わかったよ…アイス、アイスね…」

「よしつ、決まり。これで混乱は避けられるわ

話が一段落したところで、今度はアキラ（）改めアイスがアキラに質問した。

「そういえば、これはどうなんだい？君は何者？そのサーベルは何？」

次々に飛んでくるアイスの質問に対し、アキラはすらすらと答えていく。

お陰で彼はここはエリーア平原で、彼女は近くのエリーア町の住人だというのが分かった。

それとここへすぐ来れたのは、彼女が住んでいるのが町の外れでここに近かつたからとこいつかも。

彼女のサーベルは護身用で、やたらと大きいのにはちゃんとした理由があるらしい。

今まで質問に流暢に答えていたアキラだったが、

アイスが「何で僕はこんなところに来たんだろう?」といつ質問をした途端、

「えつ?……あー、あれは…………」と突然口、」もつてしまつた。

彼女はいろいろと思考を巡らせていくような表情をしていたが、結局は

「その辺の話は整理がついたらまとめて話す」とだけ言つて口を閉じてしまった。

何となく重そうな内容のせいか、長くなりそうな沈黙の時間がスタートする。

「…………えーっと」
じぱりくじで、そんな空気が苦手なアイスは話題を変えないとしだ。

「痛てて……。それにしてもひどいな。全治何週間……いや、何か月かかるやう……」「

アイスはそう咳き軌道修正。そしてそれに対しても即座に回答をするアキラ。

「何言つてんのよ。30分もあれば完治するわよ」

答えた直後、あつ、というような表情をしながら彼女はアイスの方を振り向き

「そういうえば治療を忘れていたわ」

と言いつつアイスに向かつてこもなり両手を突き出した。

「へ？ 30分？ それって一体

「さつー。」

言ひ終わるより前にアキラの手から「光の帯」が生み出され、彼を包み込む。

「へへあへうわあつー。」

アイスは膨れ上がった山吹色の光の中にすりぼりと納められた。

思いがけないこと驚き、ヒーリングにアキラに問い合わせる。

「いーいー一体これはー? 何をしてー?」

「回復術、ヒーリングよ。動かないで」

彼女は質問に簡潔に答えると、意識を集中させ治療に専念し始める。

アキラが出した光は強烈で、直視できないほどだった。

傍から見るとまるで彼が発光しているようにも見え、

まるでその場所に小さな太陽が作られたよつて感じられる。

アイスは全身でビビリとした痺れたような感覚が走るのを感じた。

「そしてそれに呼応するかのように痛みが和らいでいき、傷口もみるみるうちに塞がっていく。」

彼は直感的に細胞が活性化されていくのを感じ取ることができた。

その時アイスは一つの事に気付いて、再度アキラに聞いた。

「あの

「なによ。集中力が要るんだから話しかけないで

「何でわざわざ起きてから治療してるの?起いたら痛

「それは、助けたのが私っていう証明をするためよ

「……………ありがとうございます」

「……………」

「……………」

アイスはアキラのことが、すうじく非常識な人に思えてきた。

30分もすると、アイスの体は完全に治っていた。

無理矢理回復速度を上げたので疲れはあるが、傷のほうは跡形も残っていない。

「すうじ… 君って魔法使い？」と思わず呟くアイス。だが、

「何言つてゐの？」の世界じゅうこんなのは普通よ」 とアキラは答えた。

「いや、僕はそんなの使えないし、使っている人を見た事もないよ

アイスは何を言つてゐんだろ？と思ひながら少しお反応したが、

「当たり前でしょ。あんたたちの世界じゅう使える人はいないわ」

「あんただつて、すぐ使えるよつてになるわよ」と言つて放つ。

「あんただつて、すぐ使えるよつてになるわよ」と言つて放つ。

そのせいでアイスの頭は完全に混乱してしまった。

「え？ 待って、なんか割れて、気が付いたらこりで、魔法？ 世界？ あれ？」

そんな彼の様子を見て、アキラは溜め息まじりに結論を教えてやつた。

「……はアンタがいた世界じゃないの。別世界なのよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4201d/>

氷のパズル

2011年1月12日03時20分発行